

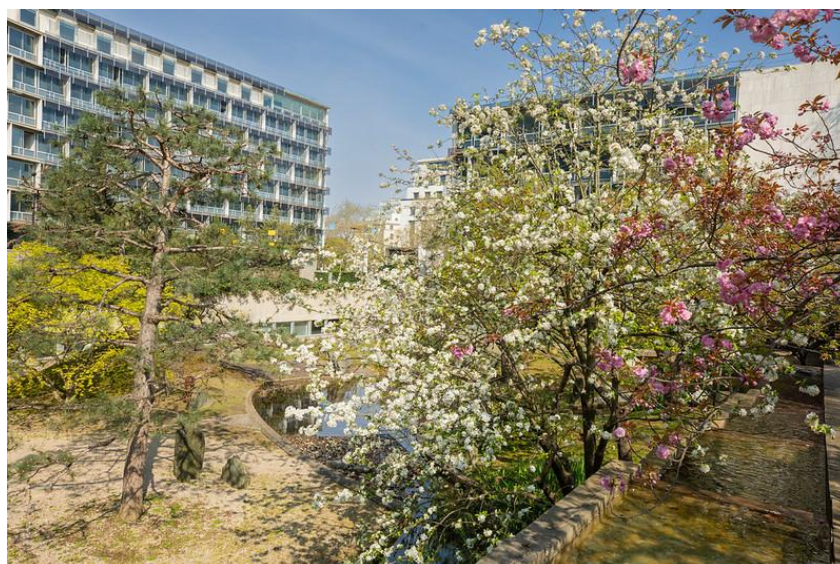
パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第17号）

「春のユネスコ」

2026年4月3日

ユネスコ日本大使の加納です。

今年もあっという間に3ヶ月が経ちました。3月も春分の日、ノウルーズを過ぎると、パリはまだ肌寒いものの、明るい日差しの日が多くなってきます。ユネスコ本部の「平和の庭」では桜がほぼ満開となっていました。



今回は、2月、3月の主な出来事をお伝えします。

（ユネスコの改革努力と日本の支援）

昨年の米国の脱退表明を受けた後で、ユネスコが現在直面する最大の課題は財政問題です。

米国はユネスコの最大拠出国で、2023年の復帰後は、通常予算の22%、年間約7500万米ドルの分担金支払いを再開しました。しかし、支払いは2024年でストップ。脱退表明の効力が発生するのは今年、2026年の年末なので、本来はまだ分担金の支払い義務があるのですが、2025年から支払いはなされておらず、米国政府代表部も閉鎖されたので、ユネスコは緊

縮財政を余儀なくされています。

こうした事情もあり、エル・アナーニー新事務局長は、昨年11月の就任直後から、業務の効率化、マンドートの実施見直し、組織改革のイニシアティブ（「ユネスコ80」）を打ち出し、各国・地域グループと精力的に意見交換を行なっています。私も何度か事務局長と個別に意見交換を行い、日本としての助言を行なってきました。

ユネスコには改善すべき課題があり、新事務局長には、直面する財政危機をむしろチャンスととらえて大胆な改革を進めてもらう必要があります。一方で、国際機関としてユネスコが果たし得る固有の役割もあります。それが十分に果たせるよう支えていくことは日本の国益でもあります。

2月17日、私がエル・アナーニー事務局長と面会した際、2025年度補正予算10億3600万円（約700万米ドル）により支援するユネスコ事業17件の目録を手渡しました。ウクライナ、パレスチナの他、アフリカ、アラブ、アジアなど21の国・地域において教育、科学、文化、情報・コミュニケーション各分野の事業を行うためのものです。2025年度は、これに加え、日本がユネスコに設置した「日本信託基金」に外務省予算から約230万米ドルを拠出し、文化遺産保全や防災、ユネスコ公文書の保全など10件の事業を支援することが決まりました。

私からエル・アナーニー事務局長には、こうした支援はユネスコ新体制に対する日本の期待の表れであり、効果的かつ有意義に活用されることを強く希望することを述べました。やりとりの模様は、日本でも報道されました。



エル・アナーニー事務局長との会談（左）と、事後の日本メディアからのインタビュー（右）

（奈良の世界遺産候補「飛鳥・藤原の宮都」視察、名古屋での講演）

3月上旬には日本に一時帰国し、外務本省で年1回開催される大使会議に出席しました。日本外交が直面する現下の課題への理解を深めるとともに、マルチテラリズム、多国間外交が置かれている厳しい状況を実感しました。

この一時帰国の機会に奈良県を訪れ、日本が世界遺産候補として推薦している「飛鳥・藤原の宮都」関連遺跡を視察しました。昨年の推薦書提出の後、諮問機関であるイコモス関係者の現地調査、日本側からの追加関連情報の提供を経て、現在はイコモス内での審査が行われている段階です。今後、5、6月頃にイコモスの勧告が出され、それを受けて7月の韓国・釜山での世界遺産委員会で21カ国からなる委員国による審議がなされる予定です。

百聞は一見にしかず。今後、「飛鳥・藤原の宮都」の価値を各国にしっかり説明していくためにも、今回現地を訪れたのですが、大変有意義でした。

奈良県には、既に3つの世界遺産、すなわち「古都奈良の文化財」「法隆寺地域の仏教建造物」「紀伊山地の霊場と参詣道」があります。今回推薦している「飛鳥・藤原の宮都」は平城京より前、6～8世紀の大和朝廷の成立・発展期の遺跡であり、構成資産は3つの自治体（明日香村、橿原市、桜井市）にまたがっています。限られた時間でしたが、飛鳥宮跡、藤原宮跡、天武・持統天皇陵古墳、高松塚古墳、キトラ古墳などを訪れ、関係自治体の考古学の専門家の方々にお話を伺いました。これら遺跡を目の前にして、古事記、万葉集の舞台が実際にここにあったかと思うと、想像が膨らんできてワクワクします。



飛鳥宮跡（左）と高松塚古墳（右）

また、奈良訪問の途中に名古屋に立ち寄り、愛知県や岐阜県のユネスコ協会や地元の高校生の方々に対して、日本とユネスコの関係についてお話をさせて頂きました。講演会のアレンジを下されたのは、元文部省・ユネスコ事務局OBで、ユネスコについてのご著書もある野口昇先生です。私が野口先生の著書をこのパリだよりの第1号で紹介したのが先生の目にとまったことから、先生との交流が始まり、この講演会の実現に至りました。



野口昇先生との懇談（上左）と講演会（上右）及び参加者との集合写真（下）

私からは、日本は1951年の加盟以来一貫してユネスコの活動を支えてきたが、背景には国内にユネスコ精神に対する幅広い支持があったこと、また、ポスト冷戦時代が終わり、国際社会における価値の体系が大きく変容する現在こそ、国際知的交流の系譜を持つユネスコの役割が重要であること、などをお話ししました。

（日本における女性パイオニアのドキュメンタリー上映）

日本から戻った後すぐの3月12日、フランスのテレビ局（CANAL+）が制作した日本関連ドキュメンタリーの上映会を、パリ日本文化会館で行いました。

テーマは「日本における女性パイオニア (Pionnières au Japon)」。様々な分野で活躍する世界の女性を取り上げるシリーズで、第1回に取り上げられたのが日本だったとのこと。番組は、日本各地を訪れた元フランス女性サッカー選手 (Laure Boulleau さん) が、相撲、寿司職人、酒造り、サッカー、漫画家など伝統的に男性中心とされた世界で活躍する日本人女性（パイオニア）達と交流しながら、その奮闘ぶりを紹介する構成となっており、日本人から観ても、新たな日本を発見できる面白いドキュメンタリーです。

ジェンダーはユネスコの取り組む優先分野でもあることから、ユネスコ日本政府代表部が共催に入る形で、上映会を実現しました。この時期は、3月3日が日本で女兒の成長を願う雛祭り、また3月8日が国際女性デーであることから、良いタイミングでの開催となりました。上映会には、監督の Mathieu Despiau さん、ナレーターの Laure Boulleau さんが参加し、そして日本からはパイオニアの一人である女性寿司職人の千津井由貴さんが駆けつけてくれ、上映後のレセプションでは寿司握りの見事な腕前を披露してくれました。



ドキュメンタリー上映会（左）と千津井由貴さんによる寿司握りの実演（右）

上映会の冒頭では私から、日本では高市早苗総理大臣をはじめ多くの女性が各界の要職を占めるようになってきていること、スポーツの分野でも多くの日本女性アスリートが活躍しており、ユネスコ事務局では日本人職員の過半数を女性

が占めていることに触れました。その上で、ユネスコが優先分野として掲げるジェンダー平等、すなわち、性別を問わず、男性、女性のいずれもがその能力を活かしていける社会を我々が目指す中で、今回のドキュメンタリーも気づきの一助になることを期待する旨、述べました。

（書道の魅力）

3月23日、24日には、書道家の土橋靖子先生を外務省の招聘プログラムで日本からお招きし、3月23日、24日と二日間にわたり、パリ日本文化会館と大使公邸において、書道を通じた日本文化の魅力についての講演と、書道の実演をして頂きました。

先生の講演は分かりやすく、また大変興味深いものでした。特に、「和」という漢字を取り上げ、この文字が「やわらぐ」、「仲良くする」、「調和・融合させる」といった様々な意味を持ち、加えて、「日本」そのものを指す文字でもあるとして、和を尊ぶのが日本人の心であると述べられた点は、多くの聴衆に響いたと思います。

また、書道の実演を間近で見るのは私は初めてでしたが、なかなかの迫力で、土橋先生が筆をとると場内がしんと静まり返り、なんとも言えない心地よい緊張感に浸ることができました。



土橋靖子先生による講演と書道の実演

なお、書道は、ユネスコ無形文化遺産保護条約に基づく無形文化遺産代表一覧表への登録を目指し、現在申請中です。この結果は今年の12月に決定します。日本政府として、この登録に向けて全力を尽くしていく所存です。

（「平和の庭」のメンテナンス）

同じ週には、日本から造園関係者が来訪、イサム・ノグチ設計の日本庭園（「平和の庭」）のメンテナンス作業を行なって頂きました。昨年9月に行われた大規模な修復作業に続くもので、今回は日仏の造園関係者による桜の剪定が中心です。最終日の3月25日には、私もエル・アナーニー事務局長とともに庭園を視察、日本の造園関係者から今回の作業の概要について説明を頂きました。

美しい庭を保つためには、たゆまぬ手入れが欠かせません。メンテナンスの重要性は日本人にとっていわば自明と言っても良いのですが、この点がユネスコにも徐々に根付きつつあるのは嬉しいことです。



日本造園関係者によるエル・アナーニー事務局長への説明

（茂木外務大臣のユネスコ訪問、エル・アナーニー事務局長との会談）

さらに、この週の金曜日27日には、G7外相会合のためフランスを訪問していた茂木敏充外務大臣がユネスコ本部を訪問、エル・アナーニー事務局長との会談が行われました。茂木外務大臣のユネスコ訪問は2020年10月以来の2回目です。

茂木大臣からは、今年加盟から75周年を迎える日本は、文化遺産保全や防災をはじめ、教育、科学、文化等あらゆる分野でユネスコと協力してきており、引き続き連携していきたい旨述べました。これに対し、エル・アナーニー事務局長からは日本の長年にわたる支援に対する謝意が改めて示されました。

茂木大臣は考古学に造詣が深く、エル・アナーニー事務局長が担当大臣として携わった大エジプト博物館にも訪問されていたことから、古代エジプトの遺跡にも話が及び、和やかな雰囲気でのやりとりとなりました。



茂木外務大臣とエル・アナーニー事務局長との会談

（「平和の庭」の石の文字の由来）

今回、たまたま同じ時期に日本の書道家の先生と造園関係者の方々がパリに来られたことで、ユネスコ本部の「平和の庭」にある石に改めて関心を寄せるきっかけができました。

「平和の庭」には、下の写真のとおり、平和の「和」とおぼしき文字が刻まれた大きな石があります。ただよく見ると、「へん」と「つくり」が我々が使っている「和」の文字とは逆になっていて、やや奇異に思っていました。石の下にある池の水面に「和」の字が反映されるからとの説もあります。

今回、書道の土橋先生にこの石についてお話ししたところ、古代の文字では「へん」と「つくり」が逆になっている例があるとのことのお話がありました。確かに、「和」の字の篆書体を調べると、この彫刻に似た、「へん」と「つくり」が現在の「和」とは逆になった文字があります。イサム・ノグチが、この彫刻を製作した時、どのようにしてこの文字を選んだのかは不明ですが、おそらく、こちらが正しい説ではないかと思えます。

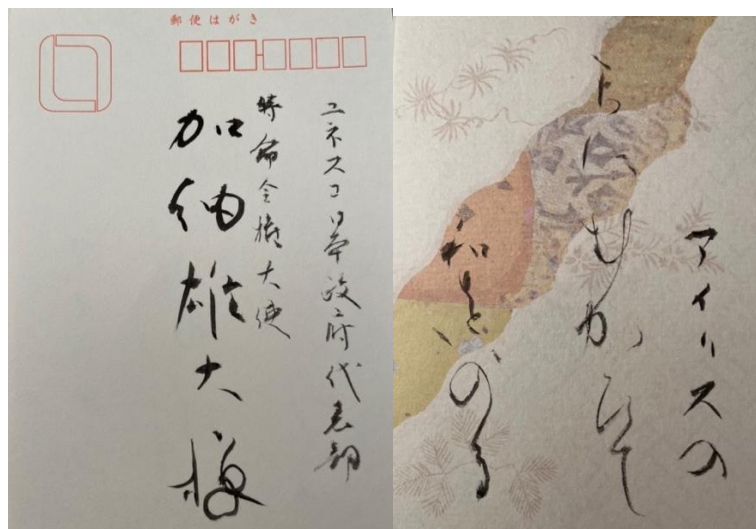


「平和の庭園」における「和」を刻んだ文字

土橋先生からはまた、直筆のお葉書を記念に頂戴しました。パリ滞在中にご自身が詠まれた俳句を記されたものです。

「アイリスの天に迎ひて和をいのる」

フランスを代表する花、アイリスが空へ向かって伸び上がり、その絢爛たる美しさを咲き誇らせる、あたかも平和を祈るかのように、との意味です。



土橋先生直筆の句

「和」の文字の由来に触れたことで、平和について、また日本について、色々と考えることができたように思います。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大